

(口絵解説)

花の病害虫 (20) — キンギョソウ —

1 キンギョソウの生産状況

地中海原産の花きであるキンギョソウは、アレンジメントと花束が需要の主流であるが、特に白色品種は仏花としても使用できるので生産額が大きい(約70%を占める)。第40次静岡農林水産統計年報—農林編—(関東農政局静岡統計情報事務所, 平成4~5年)によれば、キンギョソウは全国で6,150aの栽培面積と2,640万本の出荷量となっている。

品種面では従来のタイプから“ペンステモン咲き”と呼ばれる大輪タイプの栽培が増加している。このタイプは、生育がおう盛で茎が太い。また最近では、八重咲きやさらに大輪の3倍体品種も育成されている。

栽培面では、従来の冬~春期のみでなく、夏~秋にもストックの代替品目として利用されるようになってきた。

2 キンギョソウの病害虫の発生と防除

総論：まず病害面では、日本有用植物病名目録第2巻第3版(平成5年12月発行)によれば現在までに11種類の病害が確認されているが、この中で實際上問題となる病害は、モザイク病、疫病、葉枯病、灰色かび病、菌核病、苗腐病の6種類である。この内、モザイク病、葉枯病、菌核病が栽培地域に関係なく発生するのに対し、疫病、灰色かび病、苗腐病は産地によって発生程度が大きく異なっているようである。

害虫については、農林害虫名鑑(日本植物防疫協会, 1980年)によれば11種類が知られているが、アブラムシがほとんどの圃場で問題になるのに対し、クロモンキノメイガ、ヨトウガ(ハスモンヨトウ)、センチュウ類は発生地域に偏りがみられる。他の報告害虫については大きな問題が生じたという話を聞かない。なお、この11種類以外に、筆者は伊豆地域でハモグリバエの被害を時折目にしたが、これは上位葉に出ると実害を生ずる。

病害各論：キンギョソウにはウイルスが原因と考えられる症状がいくつか発生するが、ウイルスの同定が成されたのはCMVによるモザイク病のみである。症状が単一でないことから、実際には他のウイルスも関与している可能性がある。口絵の写真は静岡県伊豆地域で一般的な症状であるが、ウイルスの同定は行っていない。

疫病、苗腐病はともに藻菌類によって生ずる。苗の水腐れ症状が特徴であるが、苗腐病の発生が発芽直後の小苗に限定されるのに対し、疫病は10cm以上になった株や葉にも発生する。葉での発病は葉先から深緑色に軟化する。この二つの病害の防除は、土壌改良や灌水量の適正化といった排水対策が最重要で薬剤処理は二の次である。

葉枯病はキンギョソウの病害虫の中で最も一般的なものである。初め褐色で後に中心部が灰白色を呈する輪紋様の斑点を生ずる。大型の病斑が生じたり、いくつかの病斑が融合すると葉がよじれる。ハウス栽培では雨水がかかりやすい一番端の列や被覆ビニルの継ぎ目下にある列に発生しやすい。

灰色かび病は他の作物同様、花に発生することが多いが、茎に発生することもある。茎の病徴は次の菌核病に酷似する。病原菌は薬剤に耐性がつきやすいので、耕種的防除法として、冬期暖房中であっても換気だけはしっかり行いたい。

菌核病は収穫直前になって発生、急激に広がり株全体を枯死させるので、被害は最も甚大である。茎の上位から発病する場合は早めに気付くが、多くは株が密生した後に地際部から発病するので、早期発見が難しい。さらに、土壌中における耐久器官である菌核は土壌消毒にも強く、いったん発生させると菌核を根絶することが非常に困難であることも、被害を大きくしている原因といえる。菌核は茎内に生じるので、茎が腐って菌核が土壌中に入り込んでしまわないよう、発病株は直ちに抜き取り必ず焼却処分する。土壌生息性菌なので、土中埋没の効果は期待できない。また、常発地ではビニル被覆1か月後から予防散布を数回行う。

害虫各論：アブラムシは密度が高まると葉の黄化を引き起こすのみでなく、排せつ物によって“すす病”を併発するので密度が低い内に対応したい。伊豆地域で発生しているアブラムシはモモアカアブラムシであって、秋口と春先に多い。新芽の部分に寄生が多いので、9~10月と3~4月にこの部分に集中的に薬剤散布する。

ヨトウガの幼虫は実際に目にすることは少ないが、上位葉の大きな食害と排せつ物とで確認できる。圃場内に分散すると防除が困難になるので、局在している若齢を早期発見し、集中散布を行う。

(静岡県中部病害虫防除所(元 静岡県農業試験場南伊豆分場) 外側正之)